産業文化祭特集

開市、新農村建設 白新線、都市計画 その歴史と現在

今年の文化祭の大きな焦点だった開市二百年、白新線開通十周年、新農村建設事業の完了、都市計画一期工事の完工などについて、先人の苦労をしのび現在にいたる経過を知ることは意義深いものがあると思います。そこで今回はこの歴史と現在のすがたを特集しました。（編集室）

葛塚地方の開発

昔日本海岸の砂丘は、胎内川から信濃川まで連なり、この間にある加治川、新発田川、新井郷川、阿賀野川の水は砂丘に添って信濃川に合流し、新潟から海に注いでいました。川には堤防がなく、水は低地を求めて流れ、特に低地に水の溜ったところは福島潟、紫雲寺潟などとなっていました。享保十五年（二三一年前）に新発田藩主が松ケ崎の砂丘を切開いて阿賀野川を直接海へ注ぐようにしてから、この地方の水位が下りよしやまこもの繁っていた湿地帯が開墾され農地になりました。こうしてできた部落が旧葛塚町の全部、旧木崎村の南部約半分、旧長浦村の上大月、里飯野以外全部、旧岡方村の阿賀野川添え以外の部落です。

こうした一帯の中心になったのが葛塚で、公式の地名を下興野新田といいました。今の京ケ瀬村大字城の名主から転勤してきた四代の庄屋遠藤七郎左衛門宗寿が、この地方開発の恩人として開市神社にまつられているわけです。

開市

庄屋七郎左衛門は、道路を造り橋をかけ、堤防を築き、用水路を開いて土地の開発につとめました。松ケ崎切開き後できた新しい部落としては最も低地にあるこの葛塚が、最もよい所として人が集ってきました。

宝暦五年五月（二〇六年前）にはここに露店市が開かれました。今まで農具や生活物資を買うために新発田や水原まで行かなければならなかったのが、ここで買うことができるのですから便利です。しかし出店数や商品の種類は少く、住民の繁栄を満すまでには至りません。住民の生活の便をよくし、且つこの地の繁栄をはかるには、正式に開市の認可を受ける必要があります。そこで宝暦七年に認可を願出たところ、既に認可になっている新発田、水原から強い異議の申立がありました。自分たちの販路をおかされるということでしょう。七郎左衛門はこれに屈しません。

庄屋の職はその年長男保寿に引継ぎましたが、親子力を合せて開市認可の運動に当りました。土地の歴史も古くて力ある新発田、水原にはどうしてもかないません。幸いこの地が幕府領となっていたので、水原の代官に援助を求め、直接江戸幕府に陳情しました。その経過はよくわかりませんが、交通不便な昔のことですから、ずい分苦心したものと思われます。こうして願い出てから四年後の宝暦十一年十一月八日に幕府から開市が認可になりました。

この露店市ははじめから五・十の日、月六回でした。市日には近在から住民が集まり、出店者も急に多くなりました。人が多く集まるようになると、店舗を構えて常時物を商う者も多くなり、やがて市街地を形成するに至りました。最もおそく開発されたここが後年町になったのは、ここに市を開いたためであることは明らかです。

開市二百年

近隣の反対を押し切って幕府に直願

開市後の葛塚

市街地の形が概ねでき上ったのは開市後四十年くらい後のようです。このころになると他の土地の大商人が支店を出し、新津の桂長左衛門の酒造、水原の芋川才次郎及び市島徳次郎の質屋などが繁昌しました。黒山から天神山を通って葛塚へ通う農道が質置場というようになったのもそのためです。

地元の商人もまけずに努力しました。加工業も次第にさかんになりました。はじめは酒や菜種油、後にそうめんや綿織物の工業が起りました。菜種油とそうめんの製造は明治初年に衰えましたが、清酒に綿織物は人は変りましたが、今も続いて操業しています。特に綿織物は、弘化年間（約一二〇年前）五泉から技術を導入して開業し、幕末から明治、大正時代にわたり五泉、亀田、見附、栃尾と並ぶ生産地となりました。特に最も盛んだったのは大正十年ごろで、織物業四〇戸、染色業一一戸、織機は電動式一〇〇台足踏式一〇〇台、年生産高は三〇万反に達しました。その後他の生産地は時代の進展に伴う品種の改変や設備の近代化、経営の改善に努めましたが、葛塚だけは昔ながらの綿織物を続け、昭和初年の全国的な不景気のころには多く転廃業しました。今に残る業者は六戸だけです。

商業としては附近の市場以外に販路を求め活動したのは、文化年間（約一五〇年前）からはじまった綿織物の売買です。これは見附、三条、白根、小須戸などの生産物を亀田市場で買占め、新発田、中条、村上方面へ出すものです。行商には山形県の小国あたりまで行ったとのことです。これは幕末のころが最もさかんでしたが、明治初年から三条白根の商人の積極的な進出におされてしまいました。

葛塚開発後間もなくのころ三条から移住してきた呉服商は、三条屋という屋号で小間物屋を始め、幕末から明治初年にかけては、新潟県屈指の豪商となりました。葛塚に百貨店を営むほか新潟に鍛工場、沼垂に精米場東京神田に出版社、赤谷に鉄山、岩船に製塩場を営み、遠く関西から九州まで広く仕入れた商品を酒田方面へ御すための輸送には、自ら所有する汽船をつかいました。その後この町が交通の発達からとり残されたこと、他地域の事業家が進出してきたこと、三条屋自らは事業を拡げ過ぎて経営がそれに伴わなかったことなどにより、明治三十六年ごろに没落しました。

交通の移り変り

昔の交通は徒歩と舟です。開発の初期は道路が不備なため舟運びが主になります。水郷地帯である葛塚はその重要地点でした明治十一年には葛塚、新潟間に蒸汽船の航行がはじまりました。新潟と新発田、中条、村上方面との往復にもこの汽船が利用され、発着時間には多くの人力車が集まりました。経営者は幾人か変りましたが明治末年から昭和三年に廃止されるまで新潟市の安進社が運行した安進丸は、明治から大正初期生れの人々には懐しい想い出でしょう。

道路はこの地方開発後間もなく水原、新発田新潟へ通する幹線が開かれました。文化年間（約一五〇年前）には嘉山、新潟、神山を通する笹岡街道ができ、次いで浜茄子堤が築かれ天王街道ができました。こうして水陸交通の要点となっており、しかも新開地ということで他から進出してくる事業家も多かったので、町はにぎわいを呈しました。このままの勢いで進めば、今下越の新市となっている五泉、白根、燕、加茂などと共にこの町も市になっていたはずなのですが、その後発達した近代交通からとり残され、久しく沈滞を続けることになったわけです。

明治三十八年葛塚、新発田間に乗合自動車が通り、大正九年に水原葛塚、新発田間に乗合馬車が通り、大正九年に水原葛塚、新発田間に乗合自動車が通り、いよいよ陸上交通の時代になったわけですが、新潟、新発田間の国道により知事の認可を受け、明治四十二年には取締りの権限が警察署長に移され、その年三月新発田警察署長の認可を受けています。

世は大正から昭和と代りました。交通の発達から葛塚の町は却って衰微し、商店の活気がなくなったのにひきかえ、露店市はますます盛んになりました。市日には近郷の農家も朝ずして定休日となりました。

終戦によって日本は連合軍司令官の管理下に入り、新潟市にも軍政部が置かれました。占領政策の指令が次々と出され、市場管理もその命令を受けることになりました。それは、市場管理が不明確になっていたのを、明らかに市町村の行政事務とし市町村長の管理にせよということでした。市場管理は明治初年庄屋から戸長、村長へと移されたはずなのですが、いつの間にかその形は消え、露店商人間の勢力により地域的な縄張りができ、出店料の取扱いも市町村会計を通さず、ただ慣行により維持されているという形でした。

町では昭和二十四年七月十六日露店市場管理条例を施行しこれを管理しました。市場は昔から本町通りに開かれていましたが、ここが県道なので、自動車の通行が多くなるにつれ、交通の障害になってきました。昭和三十年ころから県では道路占用を片側しか許可しないことになりましたが、片側では露店を収容しきれません。これを整理するために地元の商店、町の露天商人、他から来る露店商人間の意見の調整に役場ではいろいろと苦心しましたが、県の交通取締方針がいよいよ強化されてきましたので、昭和三十二年四月九日に条例を改正し、町道である常盤町へ市場を移しました。常盤町の街路の中央には農業用の水路がありましたが、昭和三十年町で埋てていました。

開市神社

四代の庄屋遠藤宗寿を、本町他門の人たちが開市の神として稲荷神社境内に祀り、大口、正尺の人たちが用水路の神として石動神社境に祀っていました。明治四年に常盤町を埋立て新市街地とした記念に、二つの小さな祠を合せ建てたのが今の開市神社です。なおこのとき、土地の開発に尽し、また勤王思想の振起につとめた十代の庄屋遠藤国忠を合祀し、さらに、明治戊辰の役に北辰隊を組織して官軍を援けた十一代の庄屋遠藤昭忠が、昭和御大典に際し従五位を贈られたのを機会にこれも合祀しました。

都市計画一期工事

新産都市建設の声で再びクローズアップ

旧葛塚町全域が都市計画法の適用を受け、建設省告示第三四二号を以て告示されたのが昭和十八年五月十五日です。折から大東亜戦争を烈しさを増し、国をあげて生産増強に努力していました。新潟市の各工場も軍需生産にはげみ、そのころ開発されはじめた天然ガスの利用が考えられていました。新潟市の衛星都市に当る葛塚町も、小規模ながらその分工場の設置が予想されました。特に日東紡績は天然ガスを利用するガラス繊維工場の建設を法花鳥屋部落の裏に予定して調査をはじめました。これは結局この町に鉄道がないという不利な条件で、内野町に建設しましたが、とにかくこうした情勢は町発展に絶好の機会です。県でもこれらの条件を認めて応援し、都市計画ということになったものです。当時は水戸平作町長で、柄沢忠雪助役が主としてこれらの事務に当りました。

翌年から神山線に着工した神山線は補助対策事業としては、中央公民館に至る四五〇メートルで、嘉山、前新田及び大沼ブロック土地改良事業と併行して施行した町の単独事業は二、八九六メートルでした。中は前新田部落まで一一メートルそれから福島潟までは八メートルです。事業費は一四〇〇万円でした。この路線建設は最も難事業で儀善院を町浦に移転、母子寮を栄町へ移転したのをはじめ、移転家屋は二五棟、墓石の改葬三九六に及びました。これは昭和三十年に完工しました。

次いで昭和三十年に中央線の築造に着工しました。これは一、四一三メートル、巾は一一メートルです。これも移転家屋二五棟で、諸物価の値上りもあり、さらに町村合併後の事情から町の事業の重点をここに置けないことなどもあって、今年七月にようやく完工となりました。

昭和三十三年には六二、八六五坪の葛塚駅前の都市区画整理事業が完了しました。ここには六〇五区画の住宅予定地と一、二三六坪の公園予定地ができました。事業費は八、二八〇万円でした。

これより先昭和二十五年、二十六年に葛塚町が実施した単独事業による栄町住宅地は、昭和三十年町営住宅として埋立てたものを合せ面積九八二八坪、一九六区画でした。

このようにして町の都市計画は、法の指定を受けてから二十年、事業に着手してから十年たちました。第一期計画事業を終り第二期計画に入るわけですが計画区域を従来の旧葛塚町から大豊栄町に拡張し、その計画も新潟地区新産業都市建設計画と合せるため、新たな検討がはじめられています。

写真は駅前通りの舗装